

教育課程・学習成果の検証

1. 学科・専攻の「開講科目数（必修・選択必修・その他）」「非常勤講師比率」「学生の入学から卒業までの平均受講科目数」等のデータを参考に、学生の受講科目数に対して開講科目数は適切か、非常勤講師比率は適切か、学生にとって体系的な科目編成となっているか等を検証

【検証結果（全体概要）】

開講科目は選択 139、必修 63 であり、昨年度から選択-10 科目、必修-11 科目となっている。これは本学科が改組により介護福祉士養成課程が終了する 2 年前となっているからであり、学生の資格取得のために必要な科目の取り残しの有無、資格に関係なく受講を希望する学生の有無をよく確認しながら順に科目不開講が進行している。非常勤講師比率は昨年度とほぼ同値で学科開講専門科目の 29.5%であり、各学科・専攻の同平均値と比較しても低くなっている。前述の不開講科目の進行による非常勤講師比率の上昇などは見られず、現在開講されている科目の中で専任が担当する範囲は十分に保てている。学生の入学から卒業までの平均受講科目数は、2017 年 91.4、2018 年 86.7、2019 年 89.0 となった。GPA は 2017 年 2.91、2018 年 3.34、2019 年 3.39 と上昇している。受講科目数が少なくなっているのは多資格取得を目指した無理な履修登録にならないよう行ってきた履修指導が行き届き、その結果成績が上昇したことが考えられる。しかし、単位不認定率(平均登録単位数-平均習得単位数/平均登録単位数*100)でみると 2017 年 2.24、2018 年 1.44、2019 年 2.8 と上昇しており、単位不認定の起り方を慎重に調べて対策をすることで、更に GPA を向上できる可能性があると思われる。

【成果および向上施策】 ※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし。

【課題および改善施策】 ※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし。

2. 「卒業時アンケート」「PROG（ジェネリックスキルテスト）結果」「学修行動比較調査」「進路・就職状況」「免許・資格取得状況」「休学・退学・留年数」「授業アンケート結果」等のデータを参考に、学科・専攻の教育について、効果が挙げられている点、改善すべき点を検証

【検証結果（全体概要）】

「卒業時アンケート」からは、入学してからの成長の実感としての値は 5 段階評価の加重平均値で 2018 年 4.23、2019 年 4.16、2020 年 4.11 と低下しており、全体平均値とのマイナスの開きも大きくなっている。成長の機会として最も多いのは、学内の先輩・友人との人間関係によるものが高得点であり、その他尊敬できる教員に出会えた、素晴らしい授業に出会えたこと、が挙げられる。学業により成長をしたと感じているものは少なく、難しい授業を理解しようと努力したこと、ゼミでの難しいテーマにチャレンジしようとしたこと、卒業論文・制作を仕上げたこと、の点数はいずれも全体平均値から大きく下がっており、この傾向は経年的に強くなっている。総合満足度についても 2018 年 4.39、2019 年 4.40、2020 年 4.17 と低下しており、2020 年度卒業学生の満足度は目立って低かった。項目別満足度でみると、目指す資格が取得できることに満足度が高いが、幅広い知識・教養がみにつけられる授業が多い、少人数・ゼミ形式の授業が充実している、教授・先生が授業の取り組みに熱心である、という項目では全体平均からは大きく下がっている。卒業までに身につけた能力については 2018 年には物事をさまざまな視点から考える力、専門分野の知識・技術を実際に生かせる力、相手の意見を丁寧に聴く力、地域に貢献できる力、といった専門職に就くにあたって求められる能力を大学平均以上の高得点で身につけられたと感じていたが、2020 年にはどの分野にも高得点のものが

見られず、特に社会人12の基礎力においては多くの項目で全体平均を大きく下回っていた。本学科では学生の社会人に向けての一般的能力の形成、思考過程をふまえた課題達成の経験が不足しているように思われる。

PROGによる1回生時と3回生時での能力の比較では、リテラシー分野非言語処理能力0.59、コンピテンシー分野統率力0.52と大きく上昇した。一方、リテラシー分野情報収集力、構想力においてはマイナスの値が示された。

免許資格の取得については、2020年では教員免許取得が主免のみ取得及び副免取得者合わせて40名、社会福祉士受験資格取得30名、介護福祉士免許取得12名、と複数の免許及び受験資格を取得していることが分かる。社会福祉士国家試験合格率では、2018年52.8%、2019年64.7%、2020年65.5%と高水準を維持している。就職決定率は常に高く2019年は100%となった。学生の資格取得の希望には学科として応えられている状態である。学生の退学率は0.3%であり、全体平均と比較しても低い値である。教員のきめ細やかな学生対応が功を奏していると考えている。

【成果および向上施策】 ※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし。

【課題および改善施策】 ※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし。

3. 学科・専攻として、教育の質向上・改善に向けた組織的な取り組み（FD）をおこなっているか。おこなっている場合、それはどのような内容か、どのような課題認識に基づくものか。

【検証結果（全体概要）】

授業評価では全体的には「大学平均」と同程度の平均値であった。しかしながら、前年度の同期と比べると、全10項目中1項目で0.2ポイント、7項目で0.1ポイント上昇しており、生活福祉学科の専門科目においては授業改善が着実に進んでいることが示唆された。その一方で、授業時間外の学修時間に関する設問（Q3）については、「大学平均」と比べて0.2ポイント下回っていた。しかし、授業時間外の学修時間と学生の満足度は無相関であり、どのような自己学修をさせるかは十分な検討が必要である。

課題として示唆された「授業時間以外の学修」の充実について、学生がどのように取り組んでいるのか、その実態を具体的に把握するために、教員の全員と学生を交えたFD研修会を開催して「日々の学びをどう充実させるか」をテーマとしたワークショップを開催した。具体的には、日々の学修で頑張っていること・よくできていること（Keep）／日々の学修で困難を感じていること・改善を要すると自覚していること（Problem）／具体的な改善策（Try）をKPT法による対話によって明らかにし、学修改善・授業改善に反映させる取り組みを行った。

【成果および向上施策】 ※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし。

【課題および改善施策】 ※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし。

4. 教員組織の編成（採用・昇任等）にあたって、職位構成および年齢構成のバランスに配慮した編成をおこなっているか。また、カリキュラムに基づく教員組織となっているか。

【検証結果（全体概要）】

本学科は改組進行中で教員の所属が2学部にまたがる教育体制となっている。しかし、教員の必要人数は満たしており、カリキュラムに基づいた各専門分野の教授が置かれており、年齢は40台～60台の幅広い構成となっている。

【成果および向上施策】 ※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし。

【課題および改善施策】 ※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし。